

谷川俊太郎全詩集の研究（1）

大阪芸術大学 文芸学科 教授 山田 兼士

- (1) ボードレール『小散文詩 パリの憂愁』（単独訳・解説）思潮社 2018、9、30
- (2) 町田康が歌う中原中也 「PO」2018年春号 竹林館 2018、2、20
- (3) 高階杞一を読む 第十四回 水の悲しみについて—『水の町』季刊『びーぐる—詩の海へ』第39号 濤標刊 2018、4、20
- (4) 高階杞一を読む 第十五回 玩具箱の中の新奇なアイテム—『夜とぼくとベンジャミン』季刊『びーぐる—詩の海へ』第40号 濤標刊 2018、7、20
- (5) 秋山清と「コスモス」 季刊『びーぐる—詩の海へ』第41号 濤標刊、2018、10、20
- (6) 谷川俊太郎全《詩集》を読む(連載第1回) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第42号 濤標刊、2019、1、20
- (7) 対論・この詩集を読め(第37回) 池井昌樹『未知』（細見和之との対談）『びーぐる—詩の海へ』第39号 濤標、2018、4、20
- (8) 町田康『湖畔の愛』（書評）『びーぐる—詩の海へ』第39号 濤標、2018、4、20
- (9) 文字のない三つの場景（エッセイ）『みらいらん』第2号 洪水企画、2018、7、15
- (10) 詩集カタログ2018 3月—6月 『QUARTETTE』第5号、2018、8、2
- (11) 夙川の青春(巻頭エッセイ) 西宮文芸誌『表情』第27号 西宮芸術文化協会 2018、10、1
- (12) 安藤元雄『『悪の華』を読む』（書評）『びーぐる—詩の海へ』第41号 濤標、2018、10、20
- (12) 対論・この詩集を読め(38回) 犬飼愛生『stork mark』（細見和之との対談）『びーぐる—詩の海へ』第41号 濤標、2018、10、20
- (13) 原点志向と変容能力 倉橋健一詩集『失せる故郷』について 『ポスト戦後詩ノート』詩の練習、2018、10、25
- (14) 細見和之『「投壘通信」の詩人たち 詩の危機からホロコーストへ』（書評）『樹林』2018年12月号(通巻647号) 大阪文学学校、2018、12、1
- (15) 詩の果実 蜜柑／檸檬／桜桃（エッセイ）『樹林』2018年12月号(通巻647号) 大阪文学学校 2018、12、1
- (16) 『赤い鳥』創刊百周年特集アンケート「七つの子」

- 『びーぐる—詩の海へ』第42号 濤標、2019、1、20
- (17) 対論・この詩集を読め(39回) 金時鐘『背中の中の地図』（細見和之との対談）『びーぐる—詩の海へ』第42号 濤標、2019、1、20
- (18) 詩集カタログ2018 7月—12月 『QUARTETTE』第6号、2019、2、2
- (19) 詩を書くことをめぐって 二冊の新刊詩集を中心に(小池昌代との対談) 『QUARTETTE』第6号、2019、2、2
- (20) オーレリア・ラサク「一つの顔を探して」(抄訳) 『びーぐる—詩の海へ』第39号 濤標、2018、4、20
- (21) サロメ・アレール・ソプラノリサイタル(フォーレ、ドビュッシーなどの歌曲の対訳) 武蔵野市民文化会館 2018、11、8 コンサート用プログラム
- (22) シェヘラザードとドン・キホーテ(ラヴェルなどの歌曲の対訳) 京都フランス歌曲協会 2018、12、15 コンサート用プログラム

以上、前年度より2点少ないが、なんとといっても本年度は長年の研究成果として、ボードレール『小散文詩 パリの憂愁』（思潮社）の全訳と解説を刊行したことが特筆される。すでに、鈴木和成氏（図書新聞）によるものなどいくつかの書評記事も掲載され、好評と高評価を得ている。本年度の研究課題である「谷川俊太郎」については、その連載第一回を雑誌発表することができた。内容は、「序」に続いて「(1) 二十億光年の孤独」と「(2) 十八歳」。(1)は1952年刊行の谷川俊太郎第一詩集で、現在ではすでに文学史上の作品としてよく知られた作品。その初々しさと新鮮さを中心に論じた。(2)は詩人が還暦を過ぎてから(1993年)刊行した十八歳時の詩集で、(1)の拾遺詩集であり姉妹作でもある。その初期作品群がなぜ半世紀も後に初めて刊行されたのか、という点も含めて、文学史のおよび個人史的考察を行っている。この研究は次年度以後も継続していく予定で、谷川俊太郎の全70冊の詩集を引き続き読解していくつもり。さらに、一昨年度の研究課題だった「福永武彦」については、シンポジウムを元にした論考もまとめ、近く集大成の出版を企画していることを付記しておく。